HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	形態素分析に関する一考察
Author(s)	田中, 利光
Citation	北海道大学人文科学論集, 7, 1-43
Issue Date	1969-10-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34292
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_PL1-43.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

形態素分析に関する一考察

田中利光

§1.

言語の形式を分析して得られる最小の形式，いわゆる形態素が，これに先行する形式あるいは後続する形式から垂直に切断するという仕方で得られる場合がきわめて多いことは事実であるけれども，他方このようにして得られる最小の形式と同じ価値を有していながら，先行する形式あるいは後続する形式から垂直的に切断することが出来ないようになっている・別言すればそのかたちが前後の形式のかたちとさまざまな様態で融合しているものもなかなか多いことは周知の事実である．たとえば，その例としてよく引かれるフランス語の au にあっては，à と le が「完全に同時に生起している」("a complete simultaneous occurrence" E. A. Nida, Morphology, Ann Arbor 1949², p. 77) のであって，これは融合の度合がもっともはなはだしい場合のひとつといえよう．ところが私見によれば，後者のごとき場合に対しても先行あるいは後続する形式から垂直的に切断するという仕方の分析をほどこしてしまい，その結果言語事実を歪めて記述していると考えられる場合が意外と多い．本稿ではこのような場合をいくつかとりあげながら形態素の分析について多少考察することにしたいと思う．

§2.

英語の「動詞変化」について B. Bloch が行なった分析 (English verb inflection, Language 23 [1947] — 以下 Readings in Linguistics 所載のものにより引用 —) は融合している形態素について事実をはなはだしく歪めて記述している・おどろくべきものである．一般には受入れられてはいないように思われるけれども，その分析の問題性についてはかならずしも明確に意識していない人も

見受けられる．Bloch はその論文のはじめに次のようなことを述べている．「いかなる文，句，あるいは複合された単語といえども，かくかくの順序で[並んでいる] かくかくの形態素からなっていると記述することができる」(Readings, p. 243–右欄)．無論これだけでは彼の真意はつかみえないが，この論文で彼が行っているところから判断すると，形態素はすべて，先行する形式あるいは後続する形式から垂直的に切断される．しかしていかなる文，句，あるいは複合された単語といえども，こうした形態素が前後して並んでいると記述されうる，彼はこう考えていたようである．たとえば彼は過去形 cried と fled とをそれぞれ cry と flee とに比較して kray-d, fle-d に分析し，cry の場合には，base が後接辞 -d の前で不変であるが，flee の場合には fle- という特別の形で現われるという．全く同様に take は後接辞 -d と同じ後接辞の前で tuk- なる形で現われ，しかして tuk- のうしろに現われる・後接辞 -d と同じ後接辞というのは put のうしろに現われるものと同じでその形はゼロである，というのである (Readings, p. 245–左欄)．今これを図示すれば，

(1) kray : kray-d
(2) fliy : fle-d
(3) put : put-ゼロ
(4) teyk : tuk-ゼロ

のごとくなろう．さて(1)ないし(3)のごとき分析には——厳密にいうと不充分な点があるけれども，今その点は問わないことにして——私もさしあたって賛成したいと思う．しかし(2)ないし(4)のような分析に同意するわけにはいかない．なぜならば fle- は fliy と同一の価値を有しているのではない[1]．fle- には確かに fliy と同一の価値を有すると考えうるものが含まれている，と私も認める．しかしそれに加えて，「過去」を予想させるものがすでに入り込んできているのである．すなわち「複数」を表わす後接辞 -z, -s, -iz が形は互いに異なるにもかかわらず同一の形態素であるのと全く同様に fliy と fle- は同一の形態素であると考える (Readings, p. 244–右欄～p. 245–左欄参照) わけにはいかないのである．また tuk は teyk と同一の価値を有しているので

はない．tuk には確かに teyk と同一の価値を有すると考えうるものが含まれている，と私も認める。しかしそれに加えて「過去」がすでに入り込んでいることは明白な事実ではあるまいか．teyk-tuk の相異を「複数」の後接辞 -z, -s, -iz の相異と同一視することは，英語の事実をあまりにも歪めて記述したものといわなければならない．

1) この点に関連して，世界の諸言語に関する形態論的分類の歴史においてひとつの劃期的な分類を試みた E. Sapir (Language, New York 1921—以下 A Harvest Book により引用) がその分類のひとつの観点を説明して，英語の farmer, goodness, height, depth について行なった・まことに卓越した分析があることをここで指摘しておきたい．Sapir (Language, p. 129 以下) は farmer, goodness を height, depth と比較して，この二組において接辞の接合の仕方に著しい差異のあることを指摘する．すなわち -er, -ness は自立語でもある語根に全く機械的に接合される，決して独立して意義を有する (independently significant) 要素ではないが，間違えようもなく明白に (with unfailing directness) その意味を表わす，その用法は簡単にして規則的でなんの苦もなく，いかなる動詞あるいはいかなる形容詞にも附加することができるであろう (ただしこの点は行きすぎか．H. A. Gleason, An Introduction to Descriptive Linguistics, New York 1961², p. 108 によると，*meaner 'one who means' とか *seemer 'one who seems' はあらわれず，多くのアメリカ人に，奇妙なあるいはありえない形として拒否されるという) のに対して，height, depth に関しては事情が異なり，機能的に (functionally) これらが high, deep と関係を有することは，goodness が good に関係しているのと全く (precisely) 同様である (というのは問題か．全く同様といいうるのは height, depth ではなく highness, deepness ではあるまいか) が，語根要素と接辞との間の癒合 (coalescence) の度合いはより大きい，語根要素と接辞とはある程度 (measurably) 明瞭だけれども「goodness の good と -ness [とが切り離され] えたのと全く同様においそれと切り離す (be torn apart quite so readily) というわけにはいかない」，「dep- は deep と全く同一 (identical)

であるというのではない」——Sapir の行った，こうした分析は，その後アメリカでは，形態素分析の際，一般的に言って充分考慮されなかったように私は思う．ちなみに「複数」-z, -s について Sapir が Language, p. 62 で述べていることも参考のためここに引いておきたい．「英語の book-s と bag-s との子音の変化 (前者では s, 後者では z) は，なんら機能上意義を有しない (of no functional significance)．それは，前者にあっては先行する無声子音 k の，後者にあっては有声子音 g の存在によってひきおこされた全く外的・機械的な変化である．」

それならば一体なぜこのような奇矯な分析が Bloch によってなされたのだろうか．それは彼が「いかなる文，句，あるいは複合された単語といえどもかくかくの順序で［前後して並んでいる］かくかくの形態素［すなわちこれはすべて，先行する形式あるいは後続する形式から垂直的に切断される］からなっていると記述することができる」と思い込んでしまったためだ，と考えられる．しかしこの場合，「いかなる……」といいうるためにはいかなる形式についても調べたあとか，あるいはいくつかの形式についてそのように帰納できることを確認したのちに，それが更にいかなる形式についても該当すると推論しうる根拠が示されなくてはなるまい．いわゆる「ラテン文法」を他言語に無考えに押しつけることの非はよく指摘される．そして「言語に関する唯一の有用な一般化は帰納的一般化である」(L. Bloomfield, Language, London 1935, p. 20) といわれている．しかし「ラテン文法」の無考えな押しつけと本質的には同じことをさまざまな点で我々が行ってしまう危険があることを自覚していることは大切だと思う．たとえば多くの言語に共通に，しかも個々の言語に豊富に認められる事実でもって，「剰余」を割り切ってしまうことである．Bloch の「いかなる……」を，Readings in Linguistics の編者 M. Joos は，axiom のひとつと呼んでいる (p. 254) けれども，これを axiom などと呼ぶのは，axiom という単語の誤用だというべきであろう．Bloch の『英語の動詞変化』を読んでいくと，旅人をとらえては自分のベットに寝か

せ，これより短いときは引き延ばし，これより長いときはその身体を切り落してしまったという，あのプロクルーステースのベットの惨状を見るような思いがする．

§3.

ところで Bloch は，Bloomfield の形態素の定義を採用して，以上のような結果に達している．この定義は「ほとんどすべての記述言語学者によって受入れられている」ものだという (Readings, p. 243-右欄). Bloomfield の定義とは［日本語に訳しにくいので，原文のまま提示すると］"A linguistic form which bears no partial phonetic-semantic resemblance to any other form, is a simple form or morpheme." (Language, p. 161) というものである．この定義と，Language において彼が実際に行っている分析とをつき合わせつつ考えてみると，Bloomfield においても，彼がこのように定義した形態素と同じ価値を有しているのであるけれども彼の定義によってはカヴァーできないものが存在することについては明晰な自覚がなかったように見うけられる．そこでこの点に関する記述には首尾一貫性が欠けている．たとえば p. 164 では，「厳密にいうと (下点一田中)，我々は次のようにいうべきだ，ある場合には形態素は二つ (あるいは，時々，二つ以上) の異なった音形を有している，丁度 not [nət] と [nt], do [duw] と [dow], duke と duch- のように．そして，これら alternant の各々は一定の条件のもとであらわれる，と」とのべ，(kept の) kep-, ran を共にそれぞれ keep, run の alternant としている，つまりそれぞれ同一の形態素に該当している，というのである．これはまさしくあの Bloch の考えと同一線上にある，と見なすことができよう．そして p. 216 でも，たとえば go : went, bad : worse などの場合においては「zero-alternant が附属形式 [前者では -ed, 後者では -er] に，そして suppletive alternant が基礎形式に取って代わっている」という．図示すれば，

call : call-ed

go : went-$\emptyset$

old : old-er

bad : worse-Ø

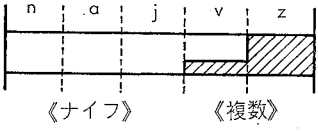
ということになろう．しかし went が単に go と，worse が単に bad と同じ価値を有しているだけではなく，同時にそれぞれ「過去」「比較」をもあらわしていることはあまりにも明白な事実ではあるまいか．went, worse において -Ø が「過去」「比較」をあらわすなどというのは，英語の事実を歪めて記述したものといわなくてはならない．なぜこのような記述が行なわれるようになったのであろうか．くりかえしていうことになるが，それは決して全体から帰納されたのではない一般化を，新しい対象に対しても妥当するかどうかを考慮することなくおしつけて割り切ってしまったためだ，と私は推量する．「言語についての唯一の有用な一般化は帰納的一般化である」という，まことにすぐれた注意を自身で行ないながら，この点では Bloomfield 自身によってこの注意が守られなかった，と考えてよいと思う．ただ Bloomfield は，Bloch ほどには硬直していない．というのは，このような記述とよい意味で矛盾する記述もしているからである．すなわち p. 216 では，p. 164 の記述とは異なり，ran について [ɛ] を substitution alternant とするような分析（それが正しいかどうかはさておき）をしている[2]．また p. 218 では，p. 216 の記述とは異なり，went は went ＋Ø ではなく，「suppletion に伴なわれているひとつの形態素からなっている」としている．

2) p. 216 “A zero-alternant may go with modification of the accompanying form.” と書いているところから判断すれば ran において「過去」を表わすのは substitution alternant [ɛ]＋Ø と Bloomfield は意識の一方では考えたらしいが，p. 218 では，men, sang などは，つまり ran は，「a substitution-feature に伴われているひとつの形態素からなっている」というようにもいっている．

また p. 214 で彼が knives, mouths, houses, does, says, has などについて行なっている分析はまことにすぐれたものだと思う．たとえば knives [najvz]

に関して，“voicing of final spirant plus suffix [-z]” を規則的な複数後接辞 [-iz, -z, -s] の alternant と記述することができる (We may describe)，というのである[3]．しかしまたこうしたすぐれた分析と踵を接して Bloch 流の分析が登場するという状態であるが，特にここで指摘するのはやめたいと思う．

3) この関係を図示すれば



のごとくなろう．すなわち音素の連続 najv- までが《ナイフ》のかたちなのではなく，v の特徴のひとつ laxity はすでに《複数》のかたちの一要素になっている．

Bloch の分析は，Bloomfield における，こうしたよい意味での矛盾に悪しき統一を与えてしまった，というものにすぎないであろう．ところで Bloch によれば，Bloomfield の形態素の定義はほとんどすべての記述言語学者によって受入れられている，ということはすでに記した．そして事実，Bloomfield 以後，彼が明確に記述しえなかった，これらの形態論上の問題をめぐって，いくつかの試みがなされるわけであるが，Bloch はその悪しきひとつの例であった．そこで次に別の二・三の試みに目を転じることにしよう．いずれも「1925年以来の，アメリカにおける記述言語学の発展 (development)」として，1957年，M. Joos により Readings in Linguistics に納められたものである．引用もこれによって行なう．

§4.

E. A. Nida は The identification of morphemes, Language 24 [1948] (Readings, p. 258 以下) で，形態素分析に関する基本的な定義として，例の Bloomfield のものをとることを言明したのち，二つ以上の形式の，かたちが異なっていても同一の形態素に該当せしめうる場合についての種々の原則，

ならびにそれに関連する諸原則などを明らかにしようと試みている．ところで，ここでは彼ののべているところをいちいちとりあげて検討することは避け，さしあたって私が問題にしている点について彼がどのような分析をほどこしているか，という点に焦点をしぼって見ていくことにしたい．

まず，Bloomfield においては，sang などにおける「過去」を substitution-alternant とする分析と，Bloch 流の分析とが混在していたが，Nida にあっては，一応後者がしりぞけられ，前者に統一されている (Readings, p. 262–左欄以下) といえよう．ただ，substitution ではなく，replacement, 'replacive' という用語を用いている．しかしながら Nida 自身も，自分で replacement という用語で表わそうとした事実の実相がいかなるものか，かならずしも明晰な概念に到達していないと思われる．replacement をめぐってまことに不可解な混乱が Nida の分析には見られるからである．たとえば bred (: breed), fed (: feed) のような単語において，/iy/ が /e/ に置換えられているのを有意味として，この replacement/e←iy/ をひとつの morpheme とする (Readings, p. 263–右欄)．この点は一応是認できよう (実は彼のこの分析には問題があるのだが，後で取り上げる)．ところが彼は更に引きつづいて left (: leave) においても同じ replacement が生起しており，left にあっては，語幹に二つの形態素 (/e←iy/ と /t/) が加えられることによって「過去」が形成されている，という．そしてこういう分析に我々が取り乱したりするのは不当であって，他の言語にも同じような例があるとして，たとえばギリシャ語の完了形のある種のものをあげている．しかしギリシャ語の完了形は Nida のここで示されているごとき分析法ではとても扱いきれるようなものではない，と思われる．たとえば λέλυκα をまず /leluk-/ (ならびに /-a/) と分析し，これは，語頭の子音が /e/ をともなってくりかえされる，というひとつの形態素と，ひとつの後接辞 /-k-/ すなわちもうひとつの形態素と，都合二つの形態素が語根に加えられて構成されている，という．しかし λέλοιπα の /leloip-/ にあっては，語頭の子音が /e/ をともなってくりかえされる，というひとつの形態素しか加えられていない，というわけである．そして λέλοιπα におけ

る母音変化は，ひとつの形態素とみなす必要はない，とし，それひとつで (independently) 意味を表わす (meaningful) ことがないからだ，という．つまり関連を有する形式 (複数) 間の唯一の相違，すなわち他にゼロという相違を伴う場合は別にして，それ以外のいかなる相違をも伴わない唯一の相違としてあらわれないからだ，というのである．まず，この最後の理由ずけは，音素分析上のある種の原則を無考えに形態素分析に際して適用したものであって，Nida もまた，ここで「ラテン文法の押しつけ」と本質的には同じ種類の誤ちに落入っている，といえよう．λέλοιπα において「完了」をあらわすのに「母音変化」も大いに貢献していることは全く明らかであり，一般にもそう認められているにもかかわらず，この事実に盲目になってしまっている．しかも悪いことにこうした原則の適用に首尾一貫性がない．というのは，λέλυκα の /-k-/ は，Nida のいう意味で「それひとつで意味を表わす」ような場合は——私の知るかぎりでは——存在しない．とすれば /-k-/ はひとつの形態素ではない，としなくてはならないところだからである．Nida は更に λέλυκα の /le…k-/ について，「二つの部分の一方が，他方を伴うことなく生起するという事実がなければ (しかしそういう事実はない—田中)，これを単一の不連続な形態素と見なすことができよう (could be taken)」(Readings, p. 263-右欄) とのべて Harris などの分析を批判しているけれども，Harris の分析の方が (完全に同意できるというのではないが)，Nida の分析よりもより真実に近い，といえよう．英語の left に話しをもどすと，この単語にあっては，bred などにおけると同じ価値の replacement が生起しているのではない．なるほど bred の replacement と同じかたちではある．しかしこのかたちが left における「過去」をあらわす形態素のかたちの一部・断片であることはあまりにも明瞭ではないか．けだし，Gleason が /-t/ に /e←(iy)/ を加えたもの (というよりも彼は /-t/ plus /ef←(iyv)/ と考えているようだ—An Introduction, p. 102 など参照) を「過去」をあらわす形態素のひとつの allomorph としているのは当然といえよう．しかしこのように Nida を批判するのは，Nida の述べている前提を無視しているからではないか，という再批判があ

る，と思う．というのは，Nida は同一の形態素に該当するためには，かならずしも同一の意味 (an identical meaning) を有していなくてはならない，というのではなく，ひとつの共通の意味上の弁別性 (a common semantic distinctiveness) を有していればよい，とするからである (Readings, p. 259, fn. 15 参照). そこで an identical meaning と a common semantic distinctiveness の定義はかならずしも明確にはなされていないのであるが，私が left においては bred などにおけると同じ価値の replacement が生起しているのではない，と云ったことに対して，これは同じ価値あるいは an identical meaning を有する replacement ではないが，a common semantic distinctiveness を有する replacement であり，そこで left の /e←iy/ をひとつの形態素としたのだ，そもそも形態素の概念がお互いにくいちがっているのだ，にもかかわらず，Nida の概念をおまえの概念と同一視して Nida を批判しているのではないか，という反論である．もし，こうした反論が可能であるとすれば，そのような a common semantic distinctiveness という概念が形態素の分析上，有効なものかどうか，私は疑問視する．なお，彼の a common semantic distinctiveness なる概念の問題性については，のちほどもう一度とりあげる機会があると思う．要するに Nida よって (だけではあるまいが) Bloomfield の矛盾が Bloch 流の悪しき統一に落入らずに解消されている，とはいうものの，問題になっている対象の分析そのものはやはり正しくないといわなくてはならない．

ところで，もっと重要な問題がある．Bloomfield は (一面では) sang などにおける「過去」を substitution-alternant とし，Nida は replacement, "replacive" などとして問題にしているが，それならば，«歌う» の方は sang において，どのような形の alternant となっているのだろうか，という点である．このことを問うことによって，substitution-alternant, replacive と呼んだものの実相について彼らが更にいかなる理解を有していたか，明かにすることができよう．ところが Bloomfield は，私の知るかぎりではその点について何ものべていない．一方 Nida は明言している．すなわち「/sæŋ/ の

ような形式においては，音素 /s…ŋ/ がひとつの不連続な形態素を構成している (constitute)」(Readings, p. 270-左欄) というのである．一体，これは正しい分析といえるだろうか．もし sing の /-i-/ と substitute あるいは replace された /-æ-/ がもっぱら「過去」をあらわしている，というのであれば，すなわち substitution-alternant, replacive の実相がそのようなものである，というのであれば，このような分析は正しいであろう．しかし，はたしてそうであろうか．私はここで，sing : sang についてではないが，これと同じ問題を含んでいると考えられるドイツ語の Vogel : Vögel などについて有坂秀世博士が行なった，まことに卓抜な分析を引用したい (『「語根」の概念について』1936 年——『国語音韻史の研究』増補新版 1957 年によって引用.) 博士は「Vogel と Vögel とを相互に結合している力として

(一) 意義上の共通性 が重要なものであることは勿論であるが，その外になお

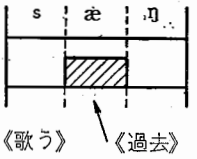
(二) 音韻上の共通性 即ち

(イ) ただに vgel という部分が共通であるということのみならず，その間に挿入される母音 (o ö) が共に有声円脣の半開母音であるという事実 (現実的共通性)，及び

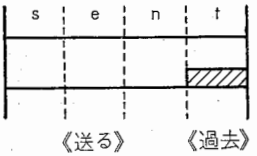
(ロ) o と ö とがドイツ語に於て文法上屢相交替するという事実 (観念的共通性)

が極めて大切なものである」(p. 651) とのべ，更に「Vogel, Vögel の o ö が持つ文法的役割は，ただに単数と複数とを区別して表わすことのみではない．両者の間に存する音韻的共通性により，Vogel, Vögel 二つの形を互に結合している，という方面も亦見落されてはならないのである」とのべておられる．この考察に際しては「推論よりは，寧ろ現実の言語意識に対する卒直な反省 (言はば直観) によった場合が多い」(p. 653) ことは博士自身が言明しているところであり，なお我々には「推論」によって確証するという課題が残っている部分があるとはいえ，この分析を単に「大体正しい方向に向っているもの」(p. 652) としてではなく，まさに正鵠を得たものとして我々は承

認してなんら差支えないのではあるまいか．そして，sang に関しても，/-æ-/ はただに「過去」を表わしているのみでなく，sing の /-i-/ と同じ単独な有声母音であるという「現実的共通性」と，/-i-/ と文法上しばしば相交替するという「観念的共通性」によって，sang を sing に結合する役割も多少果たしているのではあるまいか．これが sang の現実であるが故に，Nida も，sang においては /s…ŋ/ がひとつの不連続の形態素である，としながら，もしそうならば /-æ-/ をあっさり「挿入辞」(infix) と呼べばよいものを，わざわざ /i/ ととり変えられている /æ/ といわざるを得ないようにさせられたのではあるまいか (事実これは Nida における矛盾だと思う)．この関係を図示すれば



のごとくなろう．すなわち音素 æ の全体が《過去》のかたちなのではなく，i から æ を区別する特徴 compactness, gravity, plainness などがそのかたちなのである．したがって sang を /s…ŋ/ と /æ/ とに分析することは，あたかも waited を /wei-/ と /-tid/ に分析するようなことになるのではあるまいか (なぜなら /-tid/ が《待つ》の形式のかたちの一部をひきむしってきているように，/æ/ は《歌う》の形式のかたちの一部と呼べば呼べないことはないものをひきむしってきているからである.)——このことを私も，もっと mechanistic な「推論」で論証しえないことを残念に思う．ただ，上で紹介した knives に関する Bloomfield の分析については大方の賛同が得られるのではないか，と私は希望している．それならば sent (: send) についてはどう分析したらよいだろうか．これについては下図のように，



すなわち，/t/ 全体が「過去」の形式のかたちではなくて，/t/ の特徴の一部 tenseness のみがそのかたちだ，とすることについても，これまた大方の賛同が得られるのではないかと思う．とすれば，sang において，«過去» が，sent におけるがごとく語末の音素の一部ではないが，語中の音素の一部によってあらわされている，とする分析についても賛同が得られるのではないかと期待したい．

ここでふたたび Nida に話を戻すと，彼は，Bloomfield が knives などについて行なった・あのすぐれた分析をすこしもかえりみず，/nayv-/ と切断してしまっている (Readings, p. 260–左欄参照)．これは Bloomfield からの退歩ともいうべき点であるが，もはやくわしい批判は省略して差支えないと思う．けだし Nida が sang を /s…ŋ/ のごとく切断してしまったのも同じ原因によるものであろう．結局，今，私が問題にしている点に関していえば，Nida は，Bloomfield における矛盾をよい方向に統一しようとしたといえるが，それが不徹底であり，しかもというよりは，したがってそのよい方向へ統一しようとした分析の対象になっている事実の実相を正しく認識するにはいたっていない，といえよう．

§5.

つぎに当然，C. F. Hockett, Problems of morphemic analysis, Language 23 [1947] (Readings, p. 229 以下) における，portmanteau の概念を検討すべきであろう．

彼は，より小さい部分 (partial) から構成されていることのない再現する部分 (recurrent partial) を alternant あるいは morph と定義している (Readings, p. 229–右欄)．ただし，「より小さい部分から構成されていることのない」というのは，垂直的には切断できない（ということではかならずしもない場合もあるかのようにはじめは考えているが [Readings, p. 230 左欄上方]，結局，論文の中心ではそうなってしまっている），という意味においてである．そこでフランス語の au のごときも，これをひとつの (a single) morph といわな

くてはならないことになる (Readings, p. 230-右欄). そこで Hockett は morph の数と形態素の数が一致しない場合があることを指摘し，二つの特別な種類の morph を認めるのである (Readings, p. 236-左欄). すなわちいかなる意味も有せず，かついかなる形態素にも所属しない morph で，これを empty morph と名付け，一方，二つ (あるいは理論的にはそれ以上) の形態素に同時に (simultaneously) 所属し，かつ両方の [形態素] の意味を同時に (simultaneously) 有している morph で，これを portmanteau morph と名付けている.

彼が portmanteau の例として，まず第一にあげているのはフランス語の au である (Readings, p. 236-左欄). 次に北アメリカの土着語ヨーカツ語 (Yokuts) のヤウェルマニ (Yawelmani) 方言の WE• (1) sa• , スペイン語の動詞・現在直接法一人称単数の -o，メラネシア語派に属するといわれるフィージー語の vuaa をあげている (Readings, p. 239). ヨーカツ語とフィージー語の例については，Hockett の説を検討する力がさしあたって私にはない. スペイン語の -o とフランス語の au は，共に portmanteau と彼は呼んでいるが，なお相異点がある. すなわち，フランス語の au の場合は，二つの形態素が他のコンテクストでとるかたちを個々にあげることができるのに対して，スペイン語の -o の場合はそれができない，と Nida が指摘しているのは正しい (Readings, p. 257-左欄). ただし Nida も，いったい amo を am- と -o に分析するのが正しいかどうか，という点については Hockett と同様，なんの疑問もいだいていない. そもそも私はこの点を疑問視して，この小論のテーマとしているわけである. またこのような点は印欧語族に属する言語においては広く認められるのであって，スペイン語にかぎらないことはいうまでもない. ただ「変えるべき点は変えた上で」スペイン語の -o をフランス語の au と同様に考えることは差支えないと思う. しかしながら，彼が更に英語の men, children などに関して述べていることを読んでいくと，彼が自分で portmanteau と呼んでいる事実について，はたして充分明晰な認識に到達していたかどうか，私は首をかしげざるを得ない. 彼は，men を単一の portmanteau morph と見なすことは，ひとつの解釈だ，という (Readings, p. 239-右欄). そして更に

フランス語の au の場合とは異なり，men の場合は，これを構成する二つの形態素のうちの一方の alternant である man に men がかたちの上でも類似していることに注意し，この点を記述すべきだという (Readings, p. 239-右欄). ところが更につづけて，Hockett は morph の概念を拡張して portmanteau を二つの morph に分析することを欲するむきもあるかもしれないとし，その場合二つの論法があるという．すなわちひとつはすでに取り上げた Bloch のやり方であり，もうひとつは，men を man と交替 (alternation) a～e とに分析する論法である (Readings, p. 240-左欄). まず指摘しなくてはならないことは，Hockett においては Bloch の論法の誤謬が自覚されていないことである．後者の論法に関しては，私はこう考える，内容的には portmanteau と同じことを別の観点からこのように分析し，表現することは一応可能である，また，というよりはしたがって，men を portmanteau とする分析と相補いあうような関係にあるのであって，あれかこれかという関係にあるのではない，と．ところが Hockett は，この論法によれば men は，仮りの (tentative) portmanteau ではあるが，portmanteau ではない，といって，あたかも対立する分析であるかのように考えているのである．はたして彼は，英語の children は手に負えない (recalcitrant) として放り出してしまうのである．これについては五通りの分析が考えられるという．すなわち，(1) child|ren, (2) childr|en, (3) child|r|en, (4) child＋vowel change and -ren, (5) no cut, i.e. portmanteau である．(5) 以外のものについて若干注釈を付し，結局，その時その時の都合にうったえる以外にはない，という (Readings, p. 240-右欄). しかし私をしていわしめるならば (1), (2), (3) はいずれも英語の事実を正しく分析していない．(1), (2), (3) によればそれぞれ，čild-, čildr-, čild- を単に čayld の allomorph, alternant とすることになるけれども，そうすることはできない．なぜならば allomorph, alternant であると共に「複数」をも示しはじめているからである．ほかにもあるが，この一事だけでも (1), (2), (3) のいずれをも取ることはできない．また (4) と (5) とは，alternative (と Hockett はいうけれども) なものではない．たしかに (5) の分析のいうように，たとえば

child- と -ren などと垂直的に二つの部分に切断することはできない．一方の child- の中には「複数」をあらわす形式のかたちが一部とけこんでいるからである．その意味では no cut である．しかし一方別の観点から (4) のように分析し，表現することは一応可能である，と考えられるからである．「別の観点」とはなにか，「一応可能である」とはどのような意味であるか，等々についてはあとであらためて問題にするが，ちなみにフランス語の au に関しては，この別の観点からこのように分析し，表現することもできないほど融合の度合いがはなはだしい，ということであって，men, children などと融合の程度の差こそあれ，Hockett のように men, children と au は別のカテゴリー（という言葉の定義にもよるが）に属するという (Readings, p. 239–右欄参照) にはあたらない，と私は考えるのである．なお Hockett は children について論じたあとで比較的長い脚注 38 を付し，「言語の働きの，可能なかぎり正確で明解な像」をうるためには，ある単一的な取り扱いによるのではなく，いくつかの取り扱い方を指摘することによって可能になる場合があるとのべて，暗に，children に関して五つの取り扱い方を指摘してその時その時の都合によるのでなければどれか特にひとつを選ぶことはできないとした自分の態度を正当化しようとしている．しかしすくなくとも children に関しては，彼のそのような態度では，「言語の働きの，可能なかぎり正確で明解な像」をうることができないことは上に指摘した通りである．

次に彼の empty morph というまことに奇怪な概念を検討してみよう．「いかなる意味も有さず，かついかなる形態素にも所属しない morph」だという．なるほどこのような morph が絶対に存在しないとあたまからきめつけるわけにはいくまい．しかし彼がそれだと指摘する言語事実ははたしてこの empty morph という概念に適合するものであろうか．彼によるとアメリカの土着語フォックス語の poonimeewa の poonim- の部分は，(1) poon-im-, (2) pooni-m, (3) poon-i-m- の三つの分析が一応考えられるという．そしてもし (3) がよりよいということになれば，この -i- は empty morph だという (Readings, p. 235–右欄, p. 236–左欄参照)．しかしこれは Hockett 自身の行なっ

た定義に会っていない．もしフォックス語において -i- をはぶいて poon-m- といってもよいのみならず，poon-i-m- も poon-m- も同じ意味をあらわすというのであれば，確かにこの -i- を Hockett のいう empty morph と考えてもよいだろうが，事実はそうではない．Hockett が述べているところから想定するに，*poon-m- ということはできない．とすれば -i- を落していえば，変だ，あるいはわからないということになるのは当然予想されるところだ．poonim- 全体があらわしている意味は，断片 -i- がなくなればはなはだしく破壊されるのである．とすれば，-i- は poonim- 全体の意味をあらわすかたちの一部を構成し，したがって poonim- 全体の意味をあらわすという機能の一端をになっているといわざるを得ない．とすれば「いかなる意味も有さず」とするわけにはいかないからである．(3) の分析はフォックス語の事実を記述したものとはいえないであろう．(1) と (2) とでは，どちらがよりよいであろうか．私は今，これを決定することができない．ただ -i- において，二つの形態素の両端が融合しているという蓋然性が Hockett によって全く気ずかれないでいる点を指摘しておきたい．そのほかに彼は，(1) 同じくアメリカの土着語のひとつヌートカ語における例，(2) 同じくポタワトミ語における例，(3) 英語の感投詞 (!) hm，(4) スペイン語の動詞の conjugation vowel と呼ばれるもの，とをあげている．(4) については，さしあたってフォックス語の poonim- について上でのべたことが同じくあてはまる．(1) については，印刷の都合上，私見によって簡略化してあらわすが，次のようなものである．liho·l は 'red on the face'，sixo·l は 'having sores on the face' であるが，hino·l は 'on the face' だという．同様に lihaksol は 'red at the lips'，hapaksol は 'having a moustache'，ところが hinaksol は 'at the lips or mouth' だという．そこで hin- は「いかなる意味も有していない」という．しかし現実は「いかなる意味を有しているのか，まだ明らかになっていない」というにすぎないのではあるまいか．というのは，大変気になるところであるが，hino·l，hinaksol にはそれぞれ 'being on the face'，'being at the lips or mouth' とも「翻訳」されているのである．更に mal- は 'tied'，-aho·p は 'cause mo-

mentarily to be in front' と翻訳して，その結合 malaho·p の意味を 'ties in front' とのべている．ところが hinaho·p は 'places in front' と翻訳している．とすれば，「いかなる意味も有していない」どころか，hin- は《位置している》とか《存在している》のごとき意味ではないか，とむしろ容易に想定されるのではあるまいか．すくなくとも Hockett は「いかなる意味も有していない」ことを証明してはいない．(2) については如何．名詞が「非所属形」(unallocated) と「所属形」(allocated) の両形であらわれる (a) という．すなわち wUkUma 'chief' に対して nUtOkUmam 'my chief' あるいは kUtOkUmamwa 'your (pl.) chief'．しかし「所属形」でしかあらわれない名詞 (b) もあるという．すなわち nos· 'my father', kos· 'your (sg.) father'．ところで，両形であらわれる名詞の場合，上の例からもわかるように，「所属形」では m の要素が名詞語幹のうしろに含まれている．しかるに両形であらわれる名詞のなかには，「所属形」で m の要素が「いかなる意味の対立をともなうことなく」名詞語幹のうしろに含まれたり，含まれなかったりするもの (c) もあるという．更には「所属形」でしかあらわれない名詞と同様に，「所属形」で決して m の要素が含まれていないようなもの (d) もあるという．で，この m 要素は empty morph だというのが Hockett の考えである．しかし (a) (b) (d) 類の名詞では「所属形」に m 要素があるかないかは絶対に必要な条件になっているのであって，さしあたってこれがどう記述されるべきものか問題だとしても，フォックス語の poonim- についてすでにのべたことが同じくあてはまる．empty morph とすることは，あまりにも乱暴な分析といわなくてはならない．(3) 英語の感投詞 hm については，感投詞という周辺的な，といってわるければかなり異質な現象を (1), (2), (4) と同列に取り扱う無神経さはいわないにしても，(3) の分析そのものもはなはだ浅薄なものであって，ことさらにここでとりあげて批判する必要もないと思う．要するに Hockett が empty morph と呼ぶ事実はいまだそれとして存在が確認されていない，といわなくてはならない．

ところで Hockett はのちに Two models of grammatical description,

Word 10 [1954] (Readings, p. 393–右欄以下) でも，英語の men, children などに関する問題をふたたびとりあげ，took を例にして論じている．次の五通りの解釈が今まで提唱されてきた，あるいはされるかもしれない，という．すなわち，

(1) took は単一の形態素である．したがっていかなる形態音韻的問題も存在しない．

(2) took は二つの形態素の連続 take と -ed の portmanteau である．

(3) took は take の allomorph プラス -ed のゼロ allomorph である．

(4) took は take の不連続な allomorph t…k と -ed の allomorph /u/ が挿入されたものである．

(5) took は take プラス replacive morph /u/←/ey/ である．

以下 Hockett はひとつひとつ考察していくのであるが，(1) を受入れることができないとしているのは正しい．また (3) は Bloch のものであるが，その不当性に気づいたのは，おくればせながらけっこうであるといえよう．(4) は Nida の諸論考からひきだすことができるとして，更に Nida の replacive という術語に関してのべていることはまことに興味深い．Hockett はこれを infix として，Nida を首尾一貫させてしまうのである．そして，(4) に対して Bloch によってなされた反論 (Readings, p. 244–左欄参照) を論破し（えたと認めてよい）て，これをもっとも魅力的な (!) 解釈だと考えるのである．しかしこれは Nida に悪しき首尾一貫性を与えてしまうものであることは，すでに指摘したところである．(2) については，「かたちが部分的に類似していることをどう認めるかという問題をある意味で避けているが故に，もっとも大ざっぱな解釈」(the most general solution, since it avoids, in a sense, the problem of identification of partial similarity in shape) だという．そして took と take が音韻のかたちにおいて部分的に類似しているという事実はあいまいにされてはならないという．ここから考えると彼のいう portmanteau という概念は，単に二つあるいは二つ以上の形態素に同時に所属している，というだけで，どのような様態でそうなっているかは考慮しない，というこ

とらしい[4]. しかし考慮しないで (2) を放り出してしまうのは，なんら故なき態度といわなくてはならぬ. (5) については，Hockett の構想する item and arrangement という model の中では有効ではないとして以下のべていることは一応正しいといえよう. しかし彼のいうもうひとつの model, item and process とこの model がそもそもいかなる関係にあるものかという点に関して彼には明晰な認識がないらしく，やはり (5) もそのまま放り出されてしまっている. ここでもはや Hockett とも別れてよいであろう. 彼はフランス語の au などについて portmanteau のごとき術語を与え，これに類する事実に人々をしてより多く注目せしめ，自分でもこれを分析しようと試みたけれども，事実の正しい認識に到らず，かえって empty morph のごとき奇怪な概念をも提唱することになり，結局は Nida 流の解釈にもっとも魅力を感じる，という結果に終っている. くりかえすことになるが，(2) と (5) とはお互いにあれかこれかという関係にあるものではなく，補い合う関係にあり，(2) と (5) を正しく発展せしめ且つ関係ずけることによって解決に達する，これが私の考えであるが，そのことは次に H. A. Gleason, An introduction to descriptive linguistics, New York 1961[2] の分析を検討する際にのべることにしたい.

4) それにしても Nida (Readings, p. 257-左欄) が次のように述べていることは不可解というよりほかない. 英語の men はひとつの morph であり同時に二つの形態素 {man} と {-s} に所属するという Hockett の取り扱い方は外形的にはかなり Bloch の取り扱い方と相違しているけれども本質的には同じだ，表現の仕方 (the type of statement) を別にすれば，このような記述と Bloch のそれにはさしたる相違はない，と.

§6.

Gleason は英語の find : found などを記述するにあたり，「過去」の形態素を Nida の使っている用語を用いて replacive と名付けている (An introduction, p. 74). しかし Nida とはその内容・分析において一致しない点があり，Gleason の方がすぐれていることはすでに指摘した. また Nida とは異なり，

次のように述べている点が注目される．すなわち，勿論，英語のような言語を replacive に拠ることなく記述することは可能である．たとえば geese /giys/ は語根 /g-s/ と /-iy-/ というかたち (form) の「複数」の挿入辞形態素とからなると記述できる．その場合単数形は「単数」の挿入辞形態素 /-uw-/ を含んでいると記述しなくてはならないだろう．ところが今問題にしているようなケースを除くと英語にはいかなる挿入辞も，いかなる不連続の形態素も存在しない．geese のごとき複数形が挿入辞によって形成されていると考えると，replacive によって形成されているとする場合よりもますます (many more) 複雑なことになる．しばしばそうであるように，より簡単な説明の方が話し手の気持によりしっくりする，と (An Introduction, p. 74 以下)．ただし，「複数」の挿入辞を考えることが，かならずしも「単数」の挿入辞を考えることにはならない．このことはすでに記したように Hockett が指摘している．goose を /g-s/ と /-uw-/ などと分析せず，そのままにしておき，goose と (geese の) /g-s/ とはお互いに allomorph であって同一の形態素に該当するとは考えないで，geese を /g-s/ と /-iy-/ とに分析すれば goose も /g-s/ と /-uw-/ とに分析しなくてはならないだろうなどと，Bloch のような剛のものが (またそれにならって Gleason が) 考えたのは不可解である．この点はかならずしも「複雑なこと」にならないのである．英語にはほかに「(1) いかなる挿入辞も，(2) いかなる不連続の形態素も存在しない」という点が「複雑なこと」になるとしても．それに対して replacive によって形成されているとする場合には，Gleason 流にいえば，(3) ほかにいかなる replacive も存在しない，あるいは replacive のごとき，異質の形態素を設定しなくてはならない，という点が「複雑なこと」になろう．「複雑なこと」(1), (2) と (3) とを比較してみて，前者に関して「ますます (many more) 複雑なことになる」というのは大袈裟な表現といわなくてはならない．また，(1), (2) は，geese の /-iy-/ を挿入辞とすれば，必然的に /g-s/ なる不連線の形態素を認めなくてはならないように，相関連している「複雑なこと」なのである．一方 /-iy-/ を replacive として，これを「複数」の allomorph とした場合，«がちょう»

の allomorph は geese においてどういう風になっているか，という点を Gleason は問題（にしなくてはならないのに）にしていないのだ．この点をも問題にするとなると，挿入辞としようと replacive としようと「複雑なこと」は同じぐらいだ，といわなくてはならない．とすれば，後者の方が「話し手の気持によりしっくりする」のは「より簡単な」ためではなくて，より正しく英語の現実に肉迫しているためではないか，と考えられるのである．以上のような点は気をつけて読まなくてはならないが，Gleason が replacive とする方が挿入辞とするよりも「話し手の気持によりしっくりする」と述べている点は注目すべきだと思う．

次に Gleason の replacive についての考えを検討してみよう．彼は discover, discovered, find, found を比較して，次のような等式（私見によって多少表記その他を変えるが）でこれらの形式の関係を表わすことができるという．すなわち，

/diskəvərd/ = /diskəvər/＋/d/　　(1)

/fawnd/ = /faynd/＋/aw←(ay)/　　(2)

そして，/aw←(ay)/ を replacive と呼び，というよりも /fawnd/ と /faynd/ の母音の相違を replacive と呼び，これを /aw←(ay)/ と表記し，この表記を "/aw/ replaces /ay/" と読むのである．私自身も Gleason がこのようにのべていることに対して特に反対すべき点があるわけではない．むしろのべていない点について Gleason がいかなる理解を有していたか，そこに問題を感じるのである．というのは，こういう点である．実は，(1) と (2) とでは，/diskəvərd/, /fawnd/ という二つの形式を把握する観点に微妙な相異がある，と私は考える．すなわち (1) の場合は，/diskəvərd/ が，現実にこの形式の中で生起している /diskəvər/ と /d/ という二つの事項の間の関係としても，また現実にはこの形式の中で生起していない・すなわち記憶の上でこの形式に対比されている /diskəvər/ に /d/ が加えられて派生したという「派生史」的な関係としても考えられている，といえようが，(2) の場合には，もっぱら /fawnd/ が，現実にはこの形式の中で生起していない・すなわち記憶

の上でこの形式に対比されている /faynd/ の -ay- の部分が aw に置代えられて派生したという「派生史」的な関係として考えられている，といえよう．無論 (1) の場合の二つの関係はお互いに矛盾する関係ではない．かえって二つの関係はどちらも必要欠くべからざるものであることはいうまでもあるまい．/diskəvərd/ という形式は二つの関係の中ではじめて全体的にその実態が明らかにされるのである．(2) の場合も同じである．たとえば Gleason はこう云っている．すなわち，replacive がかかわっているひとつの単語を，これを構成する形態素に分けるのはやさしくない，と (An introduction, p. 75). この「ひとつの単語を，これを構成する形態素に分ける」ということは，まさに，現実にひとつの形式の中で（これを構成している）要素がお互いにどのように関係し合いながらこれを構成しているのか，その関係はどうなっているのか，ということを理解しようとする試みにほかならない．ところが found や geese などに関してはこの試みは「やさしくない」のである．そこで，これらについては，記憶の上でこれらときわめて密接な関係にある find や goose などとの関係をあのように記述するだけで，この試みは放棄している，というのが Gleason の実状だと思う．ところで Gleason にはこのような自己認識があまりはっきりなかったのではあるまいか．found に関して，/faynd/＋/aw←(ay)/ とし，/aw←(ay)/ は "/aw/ replaces /ay/" と読むべきだ，と彼が記していることは上に書いた．これと同じ観点から discovered を記述すれば，単に /diskəvər/＋/d/ ではなくて，/aw←(ay)/ にならい /d←/ のごとき記号を設定し，これを "/d/ suffixes" と読むべきだ，というような記述こそ，found の場合と全く平行的になり，のぞましいであろう．上に，discovered の場合，二つの観点を Gleason が同時に考えつつ，あのようにひとつの公式であらわしたかのように私はいちおうとってみたが，実際には discovered の場合は現実にこの中で二つの要素がどう関係しているか，という観点のみ，found の場合には，その観点からの記述が「やさしくない」ために，記憶の中で対比される形式 find とどう関係しているか，という観点が代わりに選ばれ，かくて二つの異なった観点が無反省に平行的にならべられ

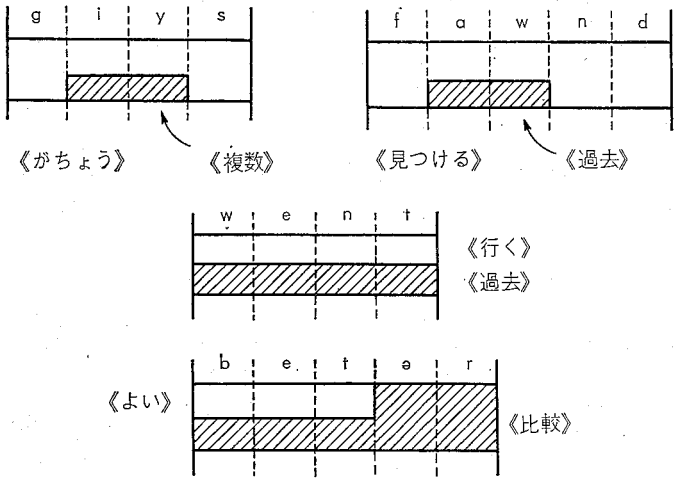
ているのではあるまいか[5].

5) Hockett の Two models of grammatical description (Readings, p. 386 以下) はこういう点を明確化しようとしたひとつの試みともいえよう．ただ，その二つの model の関連について彼は正しい理解には達していなかったのではないかと思われる．ちなみに彼のいう IP treatment のひとつの例として次のように Hockett はのべている．すなわち "*Baked* is a derived form, with a single immediate constituent *bake*, which happens to be a root, subjected to a singulary process which we can simply label **past-tense formation.** This process has various markers:" として，更に "when applied to *bake*, the marker is a /t/ which follows the phonemes of the underlying form." と述べている (Readings, p. 396-右欄). しかし IP treatment としては次のように記述されなくてはならないと思う，即 "when applied to *bake*, the marker is for a /t/ to follow the phonemes of the underlying form", と．また Z. S. Harris, Distributional structure, Word 10 [1954] (The structure of language, p. 36) は，form A は要素 e+f を，form B は要素 e+g を含んでいる，という「構造的な記述」(structural statement) を item style と呼び，他方 form A は form B から，f を g に [sic] 変えることによって派生している，というそれを process style と呼んでいる．style という言葉の定義にもよるけれども，この二つの関係は単に「構造的記述の型」の相違にすぎないと Harris は考えているらしい．しかしこの二つの style は form A, form B の実態を明らかにするためにはどちらも必要欠くべからざるもので，お互いに矛盾するものでなく，かえってお互いに相補いあうことによって form A, form B の実相を把握せしめる，と私は考える．

さて，もう一度あの「やさしくない」観点から found, geese などを考えることにしよう．Gleason は，「やさしくない」とのべたあとで，「明らかに /giys/ は二つの形態素である．しかしこの四つの音素を二つの形態素に整然

と配分することはできない」といい，自覚的か無自覚的かはさておいて，別の観点に移っていくのである．しかし「この四つの音素を二つの形態素に整然と配分することはできない」というのは正確ではない．四つのうちまずgとsの二つが一つの形態素のかたちの一部であって，もう一方の形態素のかたちに属さないことは全く明らかだからである．整然と配分できないのは，-iy- の二つの音素なのである．とすれば一体どういうことになるだろうか．-iy- という音素は，«がちょう» のかたちの一部であると同時に «複数» のかたちである，といわなければならない．これが，あの「やさしくない」観点から見た場合の geese の実態なのである．つまり複数の形態素は /iy←(uw)/ という replacive だということと，«がちょう» と «複数» が同時に生起している（くわしくはすぐ上のように記述されるべきだが）ということとは，Hockett がいうように alternative な関係にあるのではない．Gleason にもこの点について明晰な認識がないように思われる．たとえば「allomorph はかたち (form) において類似している必要はなんらない」として，その例として go : went をあげている (An Introduction, p. 80)．これをつきつめていけば Bloch にたどりつくだろう．went は go の allomorph であると同時に «過去» の allomorph でもある，という，あの「やさしくない」観点からの分析はすっかりなおざりにされている．does における «三人称単数» は /z/ plus /ə←(uw)/ と考えうる，という一方では，do : does においては二つの allomorph /duw ～də-/ がそれぞれあらわれている，とも考えうる，とし，どちらの分析も acceptable だという (An Introduction, p. 101)．しかしこれらこそ alternative な関係にある．また good, better, best について，多分もっともよい分析は /gud～bet-～be-/ という三つの allomorph を仮定することだろう，といっている (An Introduction, p. 104)．しかし bet- が «比較» を意味しはじめていることはあまりにも明白であって，Gleason はいつの間にかあの Bloch 的立場に落込んでしまっている．この場合でいえば replacive (あるいは suppletive) /bet-←(gud)/plus -er が «比較» の allomorph だというだけで，語幹の allomorph については found や geese の場合と同様，沈黙を守っていること

こそ，Gleason においては首尾一貫した態度だったと思う．私は sang, sent に関して，「やさしくない」観点から見た場合どうなっているか，をすでに近似的に図示してみた．それにならって，geese, found, went, better についても図示すれば次のようになろう．



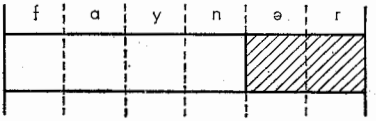
ところで我々は音素がいわゆる弁別的特徴ならびにその他の特徴のいくつかの束であり，二つの音素が異なるという場合も，単純に異なるというのではなく，ある特徴は共通だがある特徴は異なる，という風にして異なる場合が普通であることを知っている．たとえば send : sent の場合，d : t は laxity と tenseness という一組の弁別的特徴において対立・相違し，その他の特徴に関してはこれを共有する．sent の -t は《過去》のかたちであると同時に，《送る》のかたちの一部であると私は考えた．ところがひとつの音素といえども，いくつかの弁別的特徴などの束であれば，sent の -t の特徴のうち，send の -d の特徴と対立・相違する特徴 tenseness だけが《過去》のかたちで，sen プラスその他の特徴が《送る》のかたちだ，と想定することは reasonable なことではあるまいか．better の場合は，sent の場合よりもこのような分析が複雑になろう．went の場合にはもはや不可能であろう．このような事実を，sent, better, went の順に融合の度合がはなはだしくなっている，とい

うことにしたい.

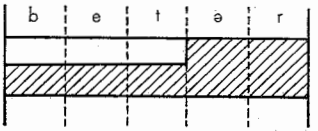
要するに Gleason は，その常識的感覚によって，Bloch, Nida などが落入ったような奇矯な分析を免れている，といえる点もあるけれども，折角正しい方向にむいている自分の分析の意味について明晰な認識に達しているとは認めがたく，これと相矛盾する分析も随所で行なう，という結果に終っている[6].

6) Gleason についてもう一言．彼は fine, finer, finest のごとき paradigm を形成するものを adjective と呼び，この定義によって，beautiful は adjective ではない，といっている (An introduction, p. 95). こういうのは Gleason にかぎらず，ひろく行なわれているようであるが，多少問題があると思う．周知のごとく日本語の「ある」の打消「ない」はいわゆる助動詞「ない」とは別語である (『岩波国語辞典』「ない」の項目参照). 後者は bound form である．同様に There are more books to be written on the subject. などの more (1) は，比較級を作る more beautiful などの more (2) とは一応別の形式なのではあるまいか．前者が free form であることは明らかだが，後者は bound form なのではあるまいか．He was more frightened than hurt. の more (3) は，It is even more a poem than a picture. She is more mother than wife. などの more と同じ形式であることは確実であるから，more (3) も「職能や語形変化の異なる色々の自立形式につく」という意味で，free form といえよう．more (2) と more (3) とは同一の形式であろうか．自然な発音では，more (3) の方が more (2) よりも強められる，という，かたちの相違もあるのではないか．日本語のいわゆる助動詞「ない」と同じく，more (2) は more (1), more (3) と異なって bound form である蓋然性がある．もしそうだとすれば more (2) と -er とは，かたちは全く似ていないが，意味と職能はまず完全に同じといってよく，しかも，お互いに相補い合う分布を示しているから，同一の形態素といってよい．とすれば，boy (: boys), ox (: oxen), child (: children) をいずれも区別せず noun と自分で定義しているのと同じように，fine (: finer), beau-

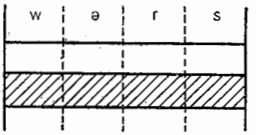
tiful (: more beautiful) を区別せず adjective と Gleason が定義してもなんら差支えないのではあるまいか．もしこれが正しければ，free form の "clitic" などは orthography の上で，他の free form と続けて書かれる場合がよくあるが，逆に bound form であるにもかかわらず，はなして書かれている例になる．また finer は



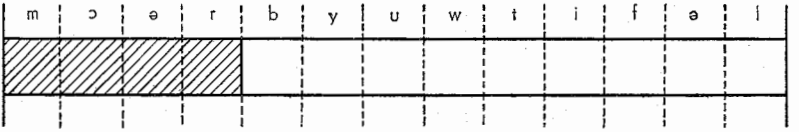
better は



worse は



more beautiful は



のごとく，同じ《比較》の形態素がさまざまな位置をとる興味深い例を我々は得ることになる．

§7.

以上，主としていわゆる post-Bloomfieldian たちの形態素分析の不備を批判してきたわけであるが，私のとりあげた点に関するかぎり（またその点だけにかぎられていることを希望しているのであるが），その奇妙な混乱と行きづ

まりは否定しえないところだと思う．そこで次に，これら post-Bloomfieldian 違とは全体的にかなり異なった方向をもち，現在きわめて大きい影響を我々に及ぼしている N. Chomsky がこの点に関して述べているところを検討することにしよう．だが私は彼を批判することに躊躇をおぼえる．というのは，もし私が彼を正しく理解しているとするならば，彼はこの点に関するかぎり彼自身の論理・表現においてあまりにも首尾一貫性に欠けているからだ．そこでかえって，私は彼をいまだ正しく理解できていないのではないか，というような気持にもなるのである．そこで以下，批判ではなくて，私の合点のいかないところをのべることにしたい．Chomsky は自分の構想する言語理論の一般的な枠組を我々が採用するならば，形態素分析の多くの問題も全く簡単に解決がついてしまう，として，丁度今迄我々がとり上げてきた問題を扱っている．すなわち次のようにのべている (Syntactic Structures, The Hague 1957, p. 58)「文法のための発見手続きを展開させようと試みていくと，我々は形態素というものは音素の連続のクラスだ，すなわちほとんど文字通りの意味で，実際の音韻的な「内容」を有している，と考えるように自然になる．ところが英語の “took” /tuk/ のような周知のケースにおいてトラブルにぶつかる．この場合，この単語のいかなる部分も，“walked” /wɔkt/ では /t/, “framed” /freymd/ では /d/, 等々としてあらわれる過去時称形態素と不自然でなく結びつけることは困難である．だが我々は形態論と音韻論とを二つの別個の・しかし相互依存的な・(19) のような形態音韻的諸規則 (田中注—これは本書 p. 32 に記されている) によって文法の中で関連ずけられている表示レヴェルと見なすことによって，このような一切の問題を避けることができる．たとえば “took” は丁度 “walked” が walk＋past と表示されるように，形態的レヴェルでは take＋past と表示される．形態音韻的規則 (19 ii), (19 v) がそれぞれこれらの形態素の連続を /tuk/, /wɔkt/ に導く．この二つのケースの唯一の相異は (19 v) の方が (19 ii) よりもはるかに一般的な規則だ，ということだ」(原文もあわせて参照されたい)．まず私は，全く簡単に問題の解決がついてしまう，ということの内容が彼が明言しているように「このよ

うな一切の問題を避けることができる」ということだと知って驚いてしまうのである．それならば，このような問題が提起された，ということの意味は一体なんだろうか．「避け」たわけであるが，このような問題がなお残っている，ということの意味は一体なんだろうか．この間の事情を別の論文 (A Transformational Approach to Syntax [1958], (The structure of language, p. 221) では次のように述べている．「単語 /tuk/ のどの部分が過去時称の形態素であるか (すなわち，それは /u/ か，あるいは replacive {ey→u} か，あるいは /teyk/ の特別な allomorph を規定する (determines) ゼロ形態素か，等々) という問題は全く起らない」．まさに私はこの問題をとりあげ，/u/ とするもの，ゼロ形態素とするものを誤りとしてしりぞけ，replacive {ey→u} とするものにひとつの留保を付してこれをとり，更にもうひとつの考え方を提示してきたのであるが，こういうことは無意味なことだったのであろうか．どうやらそうだと彼は考えているらしい．というのは，続いて「形態素《過去》を音声の表示の中に見出す，という問題は，いかなる明確な意味も有していないのである」という，まことに ex-cathedra な宣告を我々は言いわたされるからである．ところが奇妙なことに，「形式の表示規則を立てる際—中略— past→d のような規則を勿論入れるであろう」という．これはまさに「形態素《過去》を音声の表示の中に見出す，という問題」を提起し，これを解決したからこそ作ることのできた規則ではなかろうか．Syntactic Structures, p. 57 に述べていることは，彼がそのことを認めている，ということであろう．とすれば，/tuk/ の場合には，そういう問題も全く考えることなく，どうして特別に取扱われることになったのだろうか．Chomsky 自身において「問題は全く起らない」のではなくて，一旦提起されて，/u/ とすることも，ゼロ形態素とすることも言語事実に適合しないことを認識し，音素と形態素の間に compatibility relation (Syntactic Structures, p. 57) が存在しないことを確認して，はじめて特別扱いをされるようになった，というのが実状ではあるまいか．「単語 /tuk/ のどの部分が過去時称の形態素であるか，という問題は全く起らない」のではなくて，起るのではあるまいか．また起

こしてよいし，起さなければならないのではあるまいか．その際，Chomsky の言葉を使えば the requirement of phonemic identifiability of morphemes (The structure of language, p. 220 など) という故なき requirement に屈して，/u/ やゼロ形態素がそれだ，というごとき出鱈目をしなければよいのではあるまいか．このような requirement は，彼の構想する枠組においては無意味だ，と Chomsky はいう (The structure of language, p. 220)．しかし私は，すでに Bloch など post-Bloomfieldian 自身の枠組においても，無意味のみならず「ラテン文法の押しつけ」と同種の誤りであることを指摘した．

今度はもう一歩進めて，次のようなことをこの cathedra に尋ねてみよう．私も英語の went に関しては「形態素《過去》を音声の表示の中に見出す，という問題は，いかなる明確な意味も有していない」ことを認める．しかし took, sang, found などに関しては，我々は「形態素《過去》を音声の表示の中に見出」そうと試み，見出しえた，と考えた．この試みと結果は無意味なのであろうか．Chomsky もどうやら全く無意味だ，とも考えていないようなのである．というのは Syntactic Structures, p. 58 で，ここに訳出した部分をのべたあとで，注を付して，次のようなこと，すなわち，このアプローチを実は Hockett が A manual of phonology (1955), p. 15 で非常に明確に提示していること，更に Hockett が Two models of grammatical description で Chomsky のそれと非常によく似た解決を提示したが，これを「took と take は，丁度 baked と bake と同じように音韻的なかたちにおいて部分的に類似している．—中略— この事実はあいまいにされるべきではない」という理由で拒否したことを記したあと，「音韻的な形における類似」を問題にしているからである．Hockett の理由は，明らかに took に関しては，take の allomorph と「形態素《過去》を音声の表示の中に見出す，という問題」を我々が提起してかまわないし，提起しなくてはならない，と Hockett が考えていたことを示している．ところが Chomsky の場合，彼がこれを問題にしている意図と，その内容とがまたまた私をとまどわせるのである．すなわち「音韻的なかたちにおける類似は，take＋past を /tuk/ に導く形態音

韻規則を実際に公式化する際に明らかに示すことができる」とのべたあとで，「実際に形態音韻的な記述に際して，この規則を

ey→u in the context t−k+past

と無論我々は公式化するであろう」という．これを問題にしている彼の意図は Hockett と同じものなのだろうか．この公式の内容は一体何だろうか．私には不可思義な御託宣をきく思いである．また，この公式と，Syntactic Structures, p. 32 の (19) ii take+past→/tuk/, (19) vii take→/teyk/（「これらの規則の順序は，はっきりきめておかなくてはならない」のである）と，The structure of language, p. 221 の teyk+past→tuk とは，一体，いかなる相互関係にあるのであろうか．もし私が誤っていなければ，これらの公式，規則はお互いに矛盾撞着している，といわなくてはならない．もし矛盾撞着していず，お互いに相補的なものならば，took に関する我々の記述に比して，あまりにも複雑怪奇といわなくてはならない．Chomsky 自身において，この点に関するかぎり，post-Bloomfieldian 達の分析の問題性がまだ完全には克服されていないのではないか，という疑問符を付して，ここで我々は Chomsky とも別れることにしよう．

§8.

以上長々と論じてきたことの要点は，要するにはじめに記したように，形態素は，先行する形式あるいは後続する形式から垂直的に切断することができないようになっている・そのかたちが前後の形式のかたちとさまざまな様態で融合しているものもなかなか多い，ということなのだが，これに対しては，そういうことは先刻知られていて，あらためて指摘されるまでもない，という向きがあるかもしれない．事実その通りなのであるが，同時にその先刻知られている状態は，我々が長々と見てきたような，正しくないと思われる状態とそれこそ融合しているのである．もう一例をあげよう．F. G. Lounsbury が The method of descriptive morphology [1953] (Readings, p. 379 以下) で Sapir (!) のいう fusion に言及しつつ，切断する場所をきめるのが困

難で，ある程度恣意的にしかきめられない場合がしばしばあるといっている (p. 379–右欄) のは一応当を得ている．また形態素分析の policy として次のように述べていることも一応正しいといえよう (p. 380–左欄)．「どの音素も，すくなくともひとつの形態素の allomorph に属するであろう．これは，ひとつの音素が唯ひとつの形態素の allomorph か，あるいは同時に二つ (あるいはそれ以上の) 異なった形態素の allomorph [複数] に属する可能性があることを考えているのである．すなわち重なり合っている morph [複数] を認めているのである．この特別なケースはひとつは完全に重なり合っている場合である．このような時を同じくしている morph [複数] は Hockett によって portmanteau morph [複数] と呼ばれている [田中注—ただしHockett は，フランス語の au を a portmanteau morph と単数でいっている．Lounsbury と Hockett では morph の概念が多少くいちがっている．Lounsbury の方がより適切である]．もうひとつ別の特別なケースはひとつの morph の全体ともうひとつ別の morph の部分とが同時に生起している場合である」というのである．ところがこの policy と，Bloch の例の policy, Hockett の empty morph を認める policy，更にはこの三つの policy をどれも認める policy が並列的に並べられ，都合この四つの policy のどれを採用することもできる，というにいたっては，この四つの policy の意味がいまだ充分明確に Lounsbury によって認識されていない，と考えないわけにはいかない．

§9.

ここで一寸 F. de Saussure, Cours de linguistique générale, Paris 1916 における unité, rapport syntagmatique, rapport associatif, principe de linéarité などの概念について言及しておきたい．実をいうと今まで我々が問題としてきたところは，Saussure のこれらの概念と密接な関係にあり，たえず念頭にあったものなのである．そこで当然，いかなる点がこれらの概念とどのように関係しているのか，をここで検討するのが望ましいのであるが，周知のごとき事情で成立した Cours における Saussure の思想を明確にとら

えることが，我々にとってまず一仕事である．たとえば unité の問題について R. Godel, Les sources manuscrites du cours de linguistique générale, Genève-Paris 1957, p. 208 以下を参照されたい．我々が Hockett, Gleason を批判する際に頭にあつたのは Saussure の rapport syntagmatique と rapport associatif の概念だつたが，この rapport syntagmatique の観点から我々は英語の sang, worse 等々についてあのような分析を行ったといえば，Saussure のこの概念をずいぶん拡張してしまったことになろう．また，あのような分析と Saussure のいう principe de linéarité とは，どう関係することになるのか，かなりつっこんだ検討が必要だろう．しかしながら，さしあたっては割合せざるをえない．

§10.

形態素分析の際，問題になる例としてこれまでとりあげたのは，主として英語の，それも互いに類似した例であった．Bloch, Nida など，アメリカの言語学者たちの説を批判する過程で，我々自身の考えも，かなり明らかにされたと信じるが，最後に，多少他の言語の例もとりあげて，我々の考えをより明確にし，更にいままで触れる機会のなかった二・三の点について記して，小論を閉じることにしたい．

A. Martinet, A functional view of language, Oxford 1962, Elements of general linguistics, London 1964 は，まことに明晰な記述に満ちた書物であるが，その中で，我々のいう融合を amalgamation と呼んで，やはり取り扱っている．ただし，次のような点は賛成しがたい．

a) Elements p. 94.「amalgam の概念は記述者にある程度の自由を許す」として，ドイツ語の singen の過去 sang に関して，«歌う» という significatum に相応する・不連続の significans /z…ŋ/ と «過去» という significatum に相応する significans /…a…/ にこれを分析しようと，/zaŋ/ を二つの別個の significatum に相応するひとつの amalgam と解しようと，ほとんど重要でない，というのはまことに不可解である．

b) Elements p. 94. 英語 he cut. の /kʌt/ をフランス語の au と同じく，《切る》と《過去》の amalgam としている．しかし he cuts. と比較して，/kʌt＋ゼロ/ と分析すべきではないか．

c) A functional view, p. 91.「moneme (我々の形態素—田中注) の signifiant は context によって変りうる」として，イタリア語の con «with» に関して，普通は /kon/ だが，たとえば男性の冠詞の前では /ko/，たとえば女性の冠詞の前では /kol/ というかたちになる，といっている．「colla を col＋la に分析することは，la が女性の冠詞の普通の形であるから明白だし，col (*con＋il の代りにあらわれる) を co＋l に分析することは恣意的だとはいわれえない」という．しかしこのようにいえば，英語の knives は /nayv-/ と /-z/ に，フランス語の du は /d-/＋/-y/ に分析されることになろう．Martinet は du を blend と呼んで，このようには分析しないようである (Elements, p. 106). 通時論的には，イタリア語の col，フランス語の du, au ごとき形式の成立には共通の事情が存在する．また col, du がかたちの上でそれぞれ con, il あるいは de, le に多少とも類似しているのに対して，au がかたちの上で à, le に全く類似していないのは，偶然的な差異であって，本質的なものではない，と思われる．こういう事情をも斟酌して，たとえば col については，con と il が -o- のところで融合している，と分析すべきではあるまいか．

以上 a), b), c) のごとき点では賛成しがたいのであるが，ラテン語の dominus について行なっている分析 (Elements, p. 107) は大変すぐれていると思う．彼は，これについて，《主人》，《主格》，《単数》という三つの moneme を設定する．ところが《主人》の significans は domin- だということは出来ない，これはなるほど古典ラテン語におけるいわゆる「語根」ではあるけれども，domin- は，特別な一連の曲用語尾と結合してはじめて《主人》を意味する，というのである．ただし，こうした事情は次のようなことを考えると明らかになる，として彼がいっていることは，私には不可解である．すなわち，同一の語根を有する三つの単語 clavus《くぎ》，clavis《かぎ》，clava《こん棒》は，それぞれ自身の語尾を示している，ということによって明らか

に別個の意味をあらわしている，と．そもそも通時論的にも clava と他の二つが関係があるのかどうか疑わしい (Walde-Hofmann の clava の項参照). clavus と clavis にしても，共時論的には，もはや結びつきが失われているであろう．この間の事情を納得するためには，かえって我が日本語の動詞 mawasu などが役立つであろう．この形を mawaru と比較して，mawa- を形態素だ，というためには，大変な勇気がいるのではあるまいか．domin- についても，事情は同じである．「かくて significatum «主人» に相応する significans は一連の特別な語尾と結合した domin- である．«主格» に相応する significans は -us である，しかし domin- と結合して -us は同時に moneme «単数» の significans でもある.」と述べ，「明らかに，別個の significans に分析しても，実際にはなんの利点もなく，説明を複雑にするだけであろう．それ故にこそ，ラテン語において，これらの事実を説明する伝統的な方法に従った方がたしかにましなのだ」と Martinet は説明する．まことにすぐれた説明であって，私もこれに同意するものである．dominus についての上の分析は，ラテン語・ギリシャ語などの名詞・動詞などについて一般に妥当する．

次に日本語に目を転じてみよう．いわゆる五段活用動詞，たとえば「話す」の終止連体形 hanasu，命令形 hanase，連用形 hanasi などはどのように分析されるべきであろうか．Bloch などが hanas-u, hanas-e, hanas-i と無造作に切断してしまっているのは当然としても，いまだ最終的に決定を見てない，といえよう．たとえば，宮田幸一『日本語文法の輪郭』，東京 1948, p. 22 はこう書いている．「普通の文法では「変化しない部分」とか「変化する部分」とかいう単位を打立てて，これをそれぞれ「語幹」「語尾」と呼んでいる．従って，hanasu という動詞についていえば，hanas が語幹で，i, u, e などは語尾であるというように考えられている．(仮名書き文法では「はな」(hana) が語幹で，「し」「す」「せ」(si, su, se) などが語尾であるというようにさえ考えられている)．しかし，日本語の音韻組織の上から見ると，たとえローマ字文法でも，そこまで分析するのは行き過ぎであるように思う．hune : huna, sake : saka のばあいに hun とか sak という単位を打立てることが不自然で

あるように，動詞においても hanas というような単位を打立てて，これを語幹と呼ぶことは日本語においては不自然であるように私は思う.」これは我々の今，問題にしている言葉でいうと，hanasu という形式は，hanas- と -u という二つの形態素に分析できるかどうか，という点に関して，これは不自然であるように思う，という発言と我々が受取っても，論者の考えを不当にゆがめたことにはならないと思う．また有坂秀世『「語根」の概念について』(1936)(『国語音韻史の研究，増補新版』p. 645 以下) はこう書いている.「現代語の動詞「読む」に於いて

「読む」 joma-nai
jomi
jomu
jome

の何処までが語根なのであるか. jom であるか. それとも joma, jomi, jomu, jome はすべて単一な語根であって，同一語根の形が部分的に変化したものに過ぎないのであるか. 換言すれば，a i u e はそれぞれ別々の接辞なのであるか. それとも，所謂「根母音の変化」なのであるか」. これも，我々の言葉でいえば，jomu は jom- と -u という二つの形態素に分析すべきか，それとも「根母音の変化」(この本質をどう考えるべきかは更に問題であるが) として説明すべきか，どちらかきめかねている発言ととっても，あながち不当ではあるまい．また，服部四郎『附属語と附属形式』1950 (『言語学の方法』p. 468 以下) は，yomu, yomi, yome, yoma- に関して，「これらの形式およびそれと類似点のある形式の，形と意味とを較べると，それらは次のように分析できる (アクセントはしばらく考慮の外におく). すなわち，

/ˈ͡jom|u ˈ͡jom|i ˈ͡jom|e ˈ͡jom|a-/
/kak|u kak|i kak|e kak|a-/

そして，共通の部分は同じ意味を表わし，異なる部分は異なる意味を表わすと考えられるから，これらの部分はいずれも形式 (モルフェーム) であると認められる」としたが，この部分に対する追記において (『言語学の方法』p. 487

以下)「/ka⌝ku, ka⌝ki, ka⌝ke/ などという形式は夫々二つずつのモルフェーム(=最小形式) に分析できるといったが，これについては問題がある.」として，再び検討を加え，/ka⌝ku, ka⌝ki, ka⌝ke/ の /u, i, e/ は「形式と呼ばない方がよい」ということになったが，この部分に対する補註(『言語学の方法』p. 491)では，「記述の仕方は同一ではないが，この種のものをも形式 (morpheme) と呼ぶことが有勢となりつつある.」となり，結局，たとえば『意義素の構造と機能』(『言語研究』45, 1964), p. 12 では /saku/ (咲く) は /sak/ と /u/ に分析され，共に「記号素」(以前「形態素」と呼ばれていたものと同じ) と呼ばれている．Bloomfield 流の形態素の定義で割りきろうとすれば，hanasu を hanas と u とに分析することは容易であろうが，ごく便宜的に考えた場合はいざ知らず，これで一体よいのか，とあらためて考えてみると，うたがわしくなってくる——hanasu などの形式の分析のむずかしさを，今，上で見た発言はよく示していると思う．結論的に言ってしまうと，この場合も，A. Martinet がラテン語の domin- についてのべた，mentalistic ではあるが，すぐれた発言を真似て，次のように言いうる，というのが私の考えである．すなわち，「significatum «話す» に相応する significans は一連の特別な語尾と結合した hanas- である」と．あるいは「hanas- は，特別な一連の曲用語尾と結合してはじめて «話す» を意味する」と．つまり hanasu は hanas- と -u とには分析されず，-u において，«話す» のかたちの一部と，«終止連体形» のかたちとが融合している，と考えるのである．このような分析の意味は，英語の sent などについてすでに行なった分析によって理解していただけることと思う．ただ残念なのは，さしあたって積極的に，mechanistic な「推論」によってこれを実証することができないことである．

なお，上の考えと一寸異なる考えも私は持っている．実をいうと，どちらかきめかねているのである．それは以下の通りである．hana⌝su «話す» の連用形 (いわゆる「中止的用法」の場合の) hana⌝si は名詞形 hanasi⌝ «話» とアクセントは異なっているが hanasi という音素の連続の点では全く同じかたちをしている．そしてこれが偶然ではないことは周知の事実である．同様

に名詞 mukui⌉《報い》, hazi⌉《恥》がそれぞれ動詞 mukui⌉ru, hazi⌉ru の連用形 muku⌉i, ha⌉zi と同じかたち(アクセントはしばらく考慮外におく)をしているのも偶然ではない. そこで次のような等式が成立する, と考えることができよう. すなわち,

hanasi⌉ : hana⌉si : hana⌉su
＝mukui⌉ : muku⌉i : mukui⌉ru
＝hazi⌉ : ha⌉zi : hazi⌉ru

ところで mukui⌉ru, hazi⌉ru に関して, アクセントを取り除いたのち, これをそれぞれ, mukui- -ru, hazi- -ru と切断することには大方の賛成が得られるのではあるまいか. ちなみに宮田『輪郭』p. 23 は hanareru に関して, hanare, hanareru をそれぞれ「短かい語幹」,「長い語幹」と名づけ,「普通の文法では, たとえば, hanareru という形において, hanar を語幹とし, eru を語尾としている. 仮定書き文法では「はな」(hana) を語幹,「れる」(reru) を語尾としている. しかし, 私は hanareru 全体を語幹となし, u だけを語幹尾母音と見たい」とのべている. しかし, これは hanasu についてのこの論者の分析にこだわりすぎた考えで, hanareru については不自然ではあるまいか. また, 我々が行なったような分析にはなんら言及していないのも不可思議である. hanareru に関しては, hanare- と -ru に分析してなんら差支えがあるとは思われない. さて名詞 mukui, hazi, hanasi に関して, 更に分析することは可能であろうか. 更に連用形 mukui, hazi, hanasi は如何. 実は私の考えの成否はここにかかっている. もし連用形 hanasi について, 先の考えのように《語す》のかたちの一部と《連用形》のかたちとが -i において融合していると考えれば, 平行的に連用形 mukui, hazi にはかたちゼロの《連用形》の allomorph を設定するか (Bloch の日本語の分析を参照), mukui, hazi は,《連用形》を「呑みこんだポルトマントである」のごとき記述 (黒田成幸『言語の記述』東京 1960, p. 96 参照) をせねばなるまい. とすれば, 名詞形 hanasi, mukui, hazi についても同様に考えなくてはならないだろう. そこで, これは不自然であり, 連用形 hanasi はそのままで《話す》のかたちであ

り，特別に《連用形》のごとき形態素はここに含まれていない，ということになれば，

hanasi : hanasu
＝mukui : mukuiru

という等式が成立する以上，hanasu は，hanasi の allomorph のかたちの一部と《終止連体形》-ru の allomorph のかたちとが -u において融合している，ということになろう．つまり，hanasi をひとつの形態素として，hanasu, hanase などを，hanasi とそれぞれの語尾との融合したものと考えるわけである．hanasi をひとつの形態素とする，という考えとはかならずしも必然的に結びつかないのであるが，これを「動詞の原形」となづけ，「すべての活用形の中で最も基本的なもの」(宮田『輪郭』, p. 60) というような記述や，活用形の代表形として，終止形よりも，むしろ連用形をあげた方がよいという考え(三上章『現代語法序説』東京 1953, p. 62 以下) があることを指摘しておきたい．連用形 hanasi を hanas- と -i に分析すれば無論のこと，-i において《話す》のかたちの一部と《連用形》のかたちとが融合していると分析するにせよ，それと同時に名詞形 hanasi に対しても同様の分析をしなくてはならなくなる (のではあるまいか) のが，かなり不自然になり，私はどちらかというと後者の方がよいと考えている．

動詞のその他の形式，たとえば hanaseba, hanasoo, hanasanai, hanasareru, kaita《書いた》等々についても，上のような分析がなされるべきではないかと考えているが，したがって hanasu についての取り扱いと本質的に同じことになるので，一々取り上げるのは省略したい．ただ念のため附言しておくと，hanasoo についてはよく「語幹と接尾辞とがすっかり融合してしまって，その境界が明らかでない」というようにいわれる．我々も無論，同様に融合という概念をもってこの形式を記述するが，我々の融合という概念はもっぱら共時論的な概念である．たとえば hanasu の場合，hanasi の allomorph のかたちの一部と《終止連体形》のかたちが -u において融合している，といってもそのまますぐに歴史的にもそのようにして hanasu が成立

した，というのでないことは勿論である．hanasoo に関しては，hanasi の allomorph のかたちの一部と，(mukuiyoo の) -yoo の allomorph のかたちの一部が，(hanasoo の) -o- において融合している，と我々は分析するが，hanasoo という形式の歴史的な「融合」の実態がこれと異なっていることは周知の事実である．

今までとりあつかった融合と似ているが，若干異なった点のある現象について言及しておきたい．mite simatta とならんで micyatta のごとき形式がある．これも切断することができない．それならば mite と simatta の融合形だ，というだけですましておけるだろうか．非融合形 mukuiru, mukuiyoo に対して，融合形 hanasu, hanasoo には，文体上ニュアンスの相異があるわけではない．ところが非融合形 mite simatta に対して，融合形 micyatta には文体上「卑俗な」ニュアンスがある．このようなものは「弱まって融合している」とすべきであろう．フランス語の au は，à と le が別に弱まって融合しているのではない．それに対して日本語の zya あるいは zyaa は de と wa が弱まって融合しているのである．英語の don't, can't などもそうである．ギリシャ語で *κρᾶσις* «融合» と呼ばれている *κἀγώ*, *ἄνθρωπος*, *χοἰ*, *θἠμέρᾳ*, *ἐγᾠδα* なども，本稿でいう，弱まって融合している例である．Nida は a common semantic distinctiveness なる概念を設定して，形態素の identification のための原理を確立しようとしたために，かえって普通の融合と弱まって融合している場合の差が（全然認識されなかったというのではないが [Readings, p. 266 参照]）明晰に認識されず，結局 Readings, p. 268–右欄では，また Morphology, p. 76 以下では，なんらその差が言及されていないのは適切ではない．

日本語の形容詞 akakereba, akakatta などはどのように分析されるべきであろうか．また akaku は aka- と -ku に分析されることは当然としても，akaku を上の形式と比較して，-ku を -k|u と分析できるだろうか．Bloch のように，akakereba, akakatta には -ker-, -kat- のごとき形態素が含まれている，とすべきだろうか．ところで我々はこれらの形式が歴史的には形容詞の

連用形に動詞「あり」の諸活用形が「合体したもの」(橋本進吉『国文法体系論』p. 390) に由来していることを知っている．そしてたとえば奈良朝時代には，「合体しない形もあり合体したものもある。」こうした状態では「合体したもの」を我々は，形容詞連用形と動詞「あり」のかくかくの活用形とが弱まって融合している，と記述することができよう．しからば，現代日本語の akakereba, akakatta は如何．合体しない形，つまり *akaku areba, *akaku atta のごときは用いられない．ただし akaku wa atta, akaku sae areba のような形はある．また口語というには多少問題はあろうが，命令の表現としては，akakare, akaku are がある (時枝誠記『日本文法』口語篇 p. 126 参照)．このような事情すべてを斟酌して，akakereba, akakatta は，akaku と areba, akaku と atta とが弱まって融合している状態とただ融合している状態との中間の状態にある，と位置ずけるのがよいのではあるまいか．

アラビア語の /hadama/ «(彼が) こわした»，/hudima/ «(それが) こわされた»，/ḍaraba/ «(彼が) 打った»，/ḍuriba/ «(彼が) 打たれた» のごとき形式はどのように分析されるべきであろうか．/h-d-m, ḍ-r-b/ と /-a-a-a, -u-i-a/ (これが更に -a-a- と -a, -u-i- と -a に分析できないか，どうかという可能性はしばらく考慮外におく) と分析してはいけないだろうか．Gleason, An Introduction, p. 67 以下も，アラビア語と同じくセム語族に属するヘブライ語の動詞に関して同様の分析をしている．たとえば /šoméer/ 'watchman', /zookéer/ 'one who remembers', /qooṭéel/ 'killer' を /š-m-r/ 'guard', /z-k-r/ 'remember', /q-ṭ-l/ 'kill', と /-oo-ée-/ 'one who' とに分析している (p. 72). Saussure, Cours p. 315 以下にのべているところも，結局このような分析を指向している，といえよう．Gleason もいうように (p. 72)，このような分析は一見したところ多少当惑を与えるように思われる．しかし，セム語に関するこのような分析に積極的に反対する学者を我々は知らない．市河三喜・服部四郎共編『世界言語概説』下巻 p. 1181 によると「セム語学では QTL の如き子音群を語根と呼ぶ．昔のセム人自身は「語根」というような近代的術語は知らなかったので，子音を「語の魂」と考えた」(下点一田中) という．

また一方，ヘブライ語などで，子音のみをうつした文字に，後代になって点や線を附して母音を示す書式が発達したことは周知の事実である．これは，上のような分析が話し手の心理にも合致していることを暗示してはいないであろうか．英語の took などに関して，総じて印欧諸言語の類似の形式に関しては，このような分析を我々は拒否した．今その理由をセム諸言語との関連でいえば，母音の入れ替りの現象が，前者はあまりにも不透明，後者はあまりにも透明だからである．そこで，たとえばヘブライ語の šoomeer は，š-m-r と -oo-ée- とが，融合しているのではなく，「交錯している」とでも呼ぶべきであろう．(1969. 1. 3)

［なお，本稿の一部を『形態素分析に関する一注記』と題し，『服部四郎先生定年退官記念論文集』に発表する予定であることをここに附記しておかなければならない］